

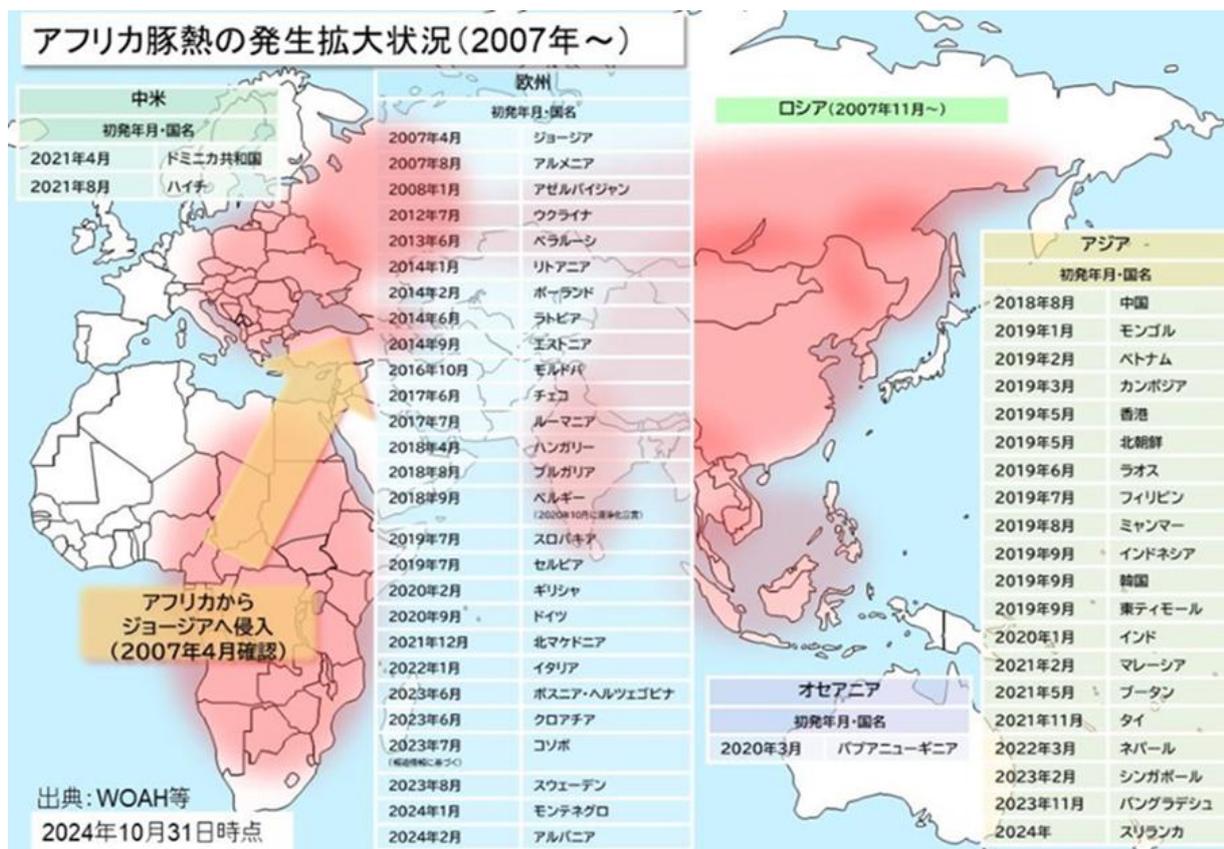
忍び寄る動物感染症～アフリカ豚熱の侵入を阻む～

22 期塾生 岡本明子

グローバル化した現代、人や物は世界を駆け巡り、意図しない不都合なモノも付随してくる。ウイルスもその一つ。ウイルスがもたらす動物感染症にアフリカ豚熱（ASF：旧名称アフリカ豚コレラ）がある。強い感染力と高い致死率を特徴とした豚やいのししの感染症だ。人にはうつらないが、養豚業や生態系に深刻な影響を与える。日本への侵入を阻もうと日々戦っている関係当局に現状と水際対策を聞いた。

感染が拡大するアフリカ豚熱

アフリカ豚熱は、2007 年ごろ、アフリカからユーラシア大陸に感染が拡大した。アジアでは 2018 年に中国で発生、韓国でも感染が南下し、対馬から 50km しか離れていない釜山でも発生しているという。



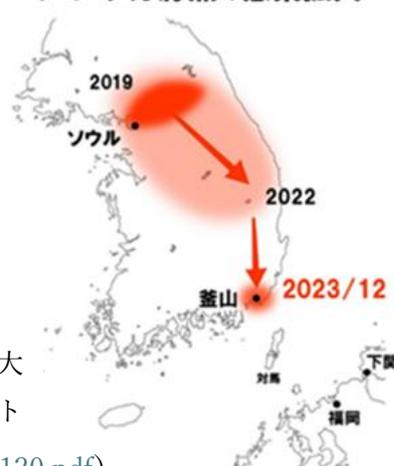
ユーラシア大陸における ASF の発生拡大状況(2024 年 10 月 31 日現在)(出典；農林水産省ウェブサイト <https://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/attach/pdf/asf-1266.pdf>)

よく似た名前の感染症に「豚熱」がある。2018 年岐阜県で発生、野生イノシシを介して広がった可能性があると考えられるが、豚熱にはワクチンがある。ただ、野生に蔓延したウイルスの制御は難しい。愛知県野生イノシシ対策室の加藤友康氏は「国の指針に基づき、より効果的に野生イノシシに摂取させるようワクチン入り餌を散布している」と話す。

朝鮮半島におけるアフリカ豚熱の感染拡大
(出典；農林水産省ウェブサイト

<https://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/attach/pdf/asf-120.pdf>)

朝鮮半島におけるアフリカ豚熱の感染拡大



それに対し、アフリカ豚熱には有効なワクチンや治療法がない。主な伝播経路は、豚同士の接触だ。口や鼻孔からウイルスが侵入して感染する。感染後4～5日から唾液や鼻汁中、糞便中に大量のウイルスを排泄する。

動物検疫所の担当者によると、「ASFウイルスは、死亡した豚の血液や、各種の臓器ならびに筋肉内に3～6か月間残存する」という。「冷凍された豚肉内で110日間以上、燻製や塩漬のハム等の中でも300日間以上感染性を失わないという報告もある」とのこと。汚染された肉製品を含む餌を豚に与えると感染が広がる可能性がある。野生イノシシの場合、水浴びや泥浴びをする水場が感染拡大の温床となる。

私たちの行動がアフリカ豚熱の侵入を阻む

ウイルスの拡散に渡り鳥の移動が関与している鳥インフルエンザと異なり、アフリカ豚熱は、人の努力で侵入・蔓延を防ぐことができる。まずは、国内に持ち込まないこと、もし発生したら、即座に伝播を防ぐことだ。

海外に出たときの注意事項を動物検疫所に聞いた。まず、「家畜関連施設にはなるべく近寄らないように」とのこと。畜産関連施設や生鳥市場等へ立ち入ったり、家畜に接触したりした場合は、日本に到着した際に必ず税関検査場内の動物検疫カウンターに立ち寄ることだ。家畜伝染病の病原体が人や物に付着しているおそれがあるからだ。そして、「海外から入国後1週間は、畜産関連施設へは立ち入らないように」とのことだった。

海外から帰るとき、肉類のほぼすべては、国内に持ち込めない。入国時の動物検疫検査で、手荷物のソーセージなどから、感染源となるアフリカ豚熱のウイルスも見つかっているという。

国内でも、キャンプや弁当の食べ残し、ごみにも注意を要する。もし、アフリカ豚熱に感染した肉が入っていた場合、野生イノシシが食べ、感染につながるかもしれない。自然界に入り込んでしまったウイルスを根絶することは、困難だ。

私たちの行動が、ウイルスの侵入を阻む。日本の養豚業、生態系を守るのは、私たち自身だ。